

醒睡笑における希望表現について

柴田 昭二
連 仲友

目次

- 一、はじめに
- 二、希望表現の構成形式
- 三、各形式の用法
- 四、おわりに

一、はじめに

本稿は、別稿^①を受け、醒睡笑を研究資料として、それにおける希望表現^②の実態を解明しようとするものである。

中国明代の笑話集の影響を受けて我が国でも江戸時代初期に多くの笑話集あるいは咄本が作成された。中でも「醒睡笑（以下、本書と略す）」はその完成形ともいえるもので、抄本も度々出版され、またほぼ同時期に「戲言養氣集」「昨日は今日の物語」などの笑話集が作られ、説経、法談などとともに「語り」の種本として広く流布した。後世にまで影響を与え、話芸としての落語に形を変えて伝えられた。編者の安楽庵策伝（一五五四年～一六四二年）は、浄土宗誓願寺の法主であり、本書の序文に「策傳某小僧の時より耳にふれて面白くおかしかりつる事を反故の端にとめ置きたり」と記すように、見聞する笑話を集め、一部に先行の説話集などからのエピソードを加えて一書に纏めたものと考えられる。策伝は京都所司代板倉勝重の下令により写本として、元和三（一六一七）年頃勝重に献上したことが勝重の奥書に記されている。八卷三冊に一〇三九話の笑話を収載し、内容により四二類に分類する。基本的には語りの文体であるが、和歌・狂歌を多く含み、漢詩・經典など漢文の引用も多い。特に巻五の「上戸」に漢文で表記された長文の一話は、飲酒の功罪を議論する内容であり、蘭肅の「酒茶論」（天正四（一五七六）年成立）など二物の優劣を漢文で記述する先行文献が念頭にあ

り、他の笑話とは異なる意図で挿入された部分であると思われる。
テキストには、岩淵匡編『醒睡笑文庫蔵本文篇「改訂版」』（笠間索引叢刊117昭和57年3月初版発行 平成12年11月改訂版第1刷発行）を用いる。その底本には静嘉堂文庫所蔵の文政一三（一八三〇）年書写の写本である。

二、希望表現の構成形式

醒睡笑における希望表現と認められる構成形式とそれぞれの用例数は以下の通りである。

「まほし」	一例
「たい」	八八例
「ばや」	一四例
「がな」	一三例
「なん」	一例
「かし」	二二例
「たまへ」	五例
「ほし」	一七例
「欲」	一三例
「ねがふ」	八例
「願」	五例
「のぞむ」	六一例
「望」	一七例
「いのる」	一三例
「祈」	一一例

以上から見られるように、希望を表す助動詞としては「たい」の用例が多数見られるが、「まほし」の用例数が極めて少ない。終助詞では「ばや」「がな」「なん」「かし」が見られるが、「かし」の用例数もつとも多い。形容詞では「ほし」のみが見られる。動詞では「ねがふ」「のぞむ」「いのる」が見られ、またそれらに関連する名詞「願」「望」「祈」を含む字音読みのの複合語が見られる。漢字表記の「欲」「願」は一般の名詞用法のほか、漢文の引用部分において漢文語法の助動詞用法に属する用例も見られる。

三、各形式の用法

1、「まほし」の用法

まず、「まほし」の用法を見る。本書に「まほし」は一例のみ見ることができ。

(1) 木鎌を持って山へこそゆけ といふ句を出せり宗匠きかまは如何と申さる、
古歌の候 行やらて山路くらしつ時鳥今一聲のきか聞まほしさに

(巻四 そでない合点 一四一頁)

例(1)は和歌の用例で、名詞の派生語名詞「まほしさ」として用いられ、「ホトトギスの鳴き声をもう一声聞きたいので。」の意を表し、希望表現の下位分類の「願望⁽³⁾」を「説明⁽⁴⁾」する用法である。これは古歌(源公忠 拾遺集一〇六)を引用したものであり、本書には地の文と会話文には「まほし」の用例は見られない。言い換えれば、策伝の使用語として「まほし」は使われていない。

2、「たい」の用法

次に、「たい」の用法を見る。本書に「たい」は八八例見られ、用例数が最も多い。その内に派生語名詞「たさ」が二例、動詞「たがる」が六例含まれる。

(2) 大児をたれ人の賞翫しけるにやけしからぬ活計のありつると見えいねて居ながらあら苦しやくといふを小児何とて色もよく無病左右にはあるが左程に苦しいかや唯食過ぎて身か熱するといへるにげなりや其様な煩ならば
我もちと持病に持ちたいよ

(巻六 児の噂 一一〇頁)

(3) 彼与兵衛申つる事のおかしさよ私こそ貧乏故地獄に落候ともせめて女共を
たすけたう御座あると (巻七 思の色を外にいふ 二四八頁)

(4) 太郎いふわれは日本の岩石を金銀にして其中へは入居たいと次郎我は日本
の海川を硯の水になし文を書やる程の威勢をなしたいと三郎いふ我は日本
の草木を人になして使たきと (巻七 似合たのぞみ 二五五頁)

(5) 其中の宿老かいひける、今の馬は我がにしたひそ、何にせう、あれにのり
さつさと、かけ廻りてはかゆきに鉢が開きたいと、 (巻七 似合たのぞみ 二五八頁)

例(2)～(5)は会話文における用例である。例(2)は「食べ過ぎくらしいの病なら、わたしも少し持病にしたいよ。」、例(3)は「わたしこそ貧乏で地獄に落ちてでもいいが、せめて女人達を救いたいものだ。」、例(4)は「自分は日本の岩石を金銀にしてその中に入れていたい。次郎はものすごい威勢を振舞いたい。三郎は日本の草木を人にして使いたい、と。」、例(5)は「いま駆けた馬は、わたしのものになりたい。どうにかしてあの馬に乗り、駆け回って手早く托鉢がしたい。」の意と解され、いずれも動作主の「願望」を直接「表出⁽⁵⁾」する用法である。ここで例(5)の「鉢が開きたい」は対象に助詞「が」を取ることを表す例である。対象物には「を」を取る例が多いが、現代語の「水が 飲みたい。」に相当する用法がすでに成立していることを示す数少ない例である。

(6) 大般若を轉讀の施主あり形はかりは出家の身よむへきあてはなければいか
やうにも座をはり布施を得たき望ある故法衣をまとひ膝を組み (巻一 無知の僧 三七頁)

(7) 小機嫌のよき折節さんげ物語をしけるか一人いふ様五鉢作る神にても仏に
てもあれあつらへたい事かあるは何たる望そやされはよ上々の酒をのむ時
静にかみくたき吟味せんとたくめといかにも口へ入レは其まゝのどへさう
さもなく走りこむ餘りに残多し鬚頭のやうにつくれて持たいと (巻五 上戸 一八六頁)

例(6)～(7)は連体修飾語としての用例である。連体形は「たき」「たい」の二形を取る。例(6)は「布施を得たい気持ちがあるので、袈裟を着て出かけて

参列した。「例(7)は「この身体をつくつたのが神でも仏でもあれ、注文したいことがあるのはどのような望みか。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(8) 夜からよる迄働きぬれども不弁さは是にまさりたり何も皆前世の約束と見てあり女房衆亭のいふ事に取あはすた、よみたくは歌よふてその隙くはに働玉へといふに彼妻夫には取りあわず隣の男に向ひて

ほに出ていねとや人の思ふらんはかなのわれや秋を見ながら
(巻五 嫉心 一六七頁)

(9) 護摩堂の本尊不動の前にそなへの餅有人見てあの不動の餅をニツ三ツこんがらとやいてくふたらよからふな新發意出てくひたくはしませたれそ無用とせいたかや

(巻八 かすり 三〇九頁)

例(8)(9)は「歌を詠みたいならば歌を詠んで、その間に働きなさい。」「新發意が出て、餅が食べたければ食べなさい。」の意で、「は」に下接して仮定・讓歩を表す文脈で「願望」を「説明」する用法である

(10) ある時内の者經箱を持帰る途中にて酒のほひをき、のみたさやるせなしそと口をあけ給はりぬ

(巻三 自墮落 一〇九頁)

(11) 住吉の花のさかりに少人を誘引したる方へ
色もなき此一枝を送る也人の心の花の見たさに

(巻五 嫉心 一六一頁)

例(10)(11)は「たい」の派生語名詞「たさ」の用例である。「酒の匂いを嗅いで、飲みたい気持ちがあるにもならない」「あなたの心の花を見たいので。」の意と解され、「願望」を「説明」する用法である。

(12) 物はか、ねと利口な者にてんひんとは何と書そや繼母と書と答ふそれは不都合なる事というされはこそ唐から本の文字はあらふとま、よま、母と書かよいなせになれはくへとくはねとた、きたがる
たたいてはすりすり髪おしむうい子を膝にたさのせて

(巻三 不文字 九〇頁)

醒睡笑における希望表現について

(13) 法華の沙門と時宗の法師と知音にてとりく参會ありしかいか、はしたりけん法花の沙門此比栗毛の馬をもとめたり一段氣に入て時宗栗毛と名を付たは何の子細に時宗は出たぞとかく此馬おとりたがる則時宗の法師我も四五日己前に葦毛の馬をかうたは名をは法花葦毛と付たよいかなれば法花とはいふそとかく彼馬口がこはさに

(巻八 頓作 二九〇頁)

例(12)(13)は「たい」の派生語動詞「たがる」の用例である。「若者になれば喰つても喰わなくても天秤棒で叩きたがる。」「とかくこの馬は踊りたがる。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

3、「ばや」の用法

次に、「ばや」の用法を見る。本書に「ばや」は一四例見られ、その内の九例が歌に使用されている。

(14) かくし題をいみしく興せさせ給ひける御門のひちりきをよませられけるに
(略)

めぐりくる春くことに桜花いくたひ(ち脱カ 著者)りき人に問はや
といひたりけるそやさしき
(巻五 嫉花 一六六頁)

(15) 境にて牡丹花のもとへくたりたる饅頭を五ツ送りければ
色黒くしかもかたふて人くはす此饅頭を馬になさはや

(巻七 舞 二八一頁)

(16) 花をのみ待らん人に山里の雪間の草や春をみせはや
利休はわびの本意とて此歌を常に吟し心がくる友に向ひてはかまへて亡失せされとなん
(巻八 茶の湯 三二九頁)

(17) 一路沙門和泉にて鉢に出られし心ある人内より 何をかなまいらせはやと思へども 達磨宗には一物もなし 一路

(巻七 似合たのぞみ 二五六頁)

例(14) (17)は歌における用例である。例(14)は「桜の花は何度散った

かと人に聞きたいものだ。」例(15)は「このくさった饅頭を馬にやりたい。」例(16)は「咲く花ばかりを待っている人に山里の雪間の小さな緑で春の来るを見せたい。」例(17)は「なにかをさし上げたいと思うが、銭のない達磨宗の私には何物もない。」の意と解され、例(14)～(16)は「願望」を「表出」する用法であり、例(17)は「願望」を「説明」する用法である。

(18) 酒盛のなかば臺の物に鶴のつくりたるを取あげ鶴の舞を見はやなどはやされよきふりに舞おさめしを見 (巻一 鈍副子 三〇頁)

(19) 誕一検校ある座舗物語のついで積にはとかく身をつかふよしとき、目のよき茶磨を積のくすりに挽ばやと望めるを (巻八 頓作 三〇〇頁)

例(18)～(19)は会話文における用例である。「鶴の舞を見たいものだ」と囃され、「よい刻み目のある茶臼で癩の薬を碾きたい。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

4、「がな」の用法

次に、「がな」の用法を見る。本書に「がな」は二三例見られ、その内に七例が歌に、五例が能の台詞に、一例が会話文に用いられている。

(20) 福は宵からよそへみた物をとてつふやきける雄長老
鬼は内福をはそとへ出すともとし一ツつ、よらせすもがな

(巻一 祝過るもいな物 四二頁)

(21) 雄長老

大なる柿うちはがな二三本貧乏神をあふきいなさん
也足の判柿團扇は貧乏神のつくといへは二三本にてあふく事いか、弥増に
長すへくや (巻一 祝過るもいな物 四二頁)

(22) とても行者の奇特ならば いのり出せし其餅を ま一度いのり入玉へ
大児

大そらには、かる程の餅もかないける一期にかぶりくらはん
(巻六 兒の噂 二二二頁)

(23) 馬のよみたる歌はいまたきかず

世の中にさらぬ別のなくもかな千代もといゆる人の子のため
是こそ馬のよみたる證歌さうよ是は業平のにてはなきか
(巻七 謡 二七二頁)

例(20)～(23)は歌における用例である。「がな」「もがな」は体言にも用言にも直接に下接することができる。例(20)は「鬼は内に、福は外へと出してしまつても、年を取ることがはしたくない。」例(21)は「貧乏神が好むという大きな柿団扇が二、三本ほしい。」例(22)は「大空を覆う程の大きな餅がほしい。」例(23)は「この世の中に避けられない別れというものがないければよいのだが。」の意と解され、いずれも「願望」を「表出」する用法である。

(24) 唐船の謡に身もかな二ツとあるを一人はいもがな二ツと覚ゆる一人は身もがな二ツと覚へいさかひになり (巻四 そでない合点 一四七頁)

例(24)は能の「唐船」における台詞を引用する部分にあり、「身体が二つほしいというせりふをある人が、体が二つほしいものだ、と言うと別の一人が、芋が二つほしいと覚えたと言って争いになり、」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(25) 客をえて食の用意をしけるに亭主走り廻りたまさかの來臨なるにいかなるめつらしき物もかなといふ (巻四 唯有 一五三頁)

例(25)は会話文における唯一の用例であり、「思いがけない客のために珍しい物があればいい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

5、「なん」の用法

次に、「なん」の用法を見る。本書に希望表現と見られる「なん」と解釈できる用例が一例見られる。

(26) 遣唐使もろこしにある間に子あり日本へ帰る時妻に此子乳母はなれん程には迎へ取へしと契りて帰朝しぬ遣唐使のくることに消息尋れとおとなし母大に恨兒の首に簡を結付縁あらは親に逢なんと海に投入

例(26)は文脈から「逢いなん」と読み、「縁があれば父親に逢うだろう。」の意と解することができるが、「逢わなん」と読み、「縁があれば父親に逢ってほしい。」の意と解することができる。後者で取れば希望表現であり下位分類の「希求」を「表出」する用法である。

6、「かし」の用法

次に、「かし」の用法を見る。本書に希望表現を表す「かし」が二例見られる。

(27) 客は如何なる藝能の候ぞ、ちと歌道を心得てありと、さらば幸の仕合也、子を餘多持たるにははふて發句を沙汰あれかしとのそむ時

むすこたちかしらかたかれ石佛 (卷一 祝過るもいな物 四四頁)

(28) 如何にも鈍なる傍輩是を見我レにも夢物語せられよかし氣にあふ様にいふて小袖をとらん物と思ひみつるか (卷一 祝過るもいな物 四八頁)

(29) 江州安土に箔打十人斗みな當宗也いひ合せ与兵衛といふなかの使いを一人か、へけれこれは浄土宗也そも奉公せむと思は、日蓮の教門に入やと類にす、むれとも合点せず 有十人の中分金子一枚与兵衛につかはし手前ならずは重ねても合力せんする是非受法せよかしと与兵衛力不及大乘妙典を頂戴せり (卷七 思の色を外にいふ 二四九頁)

例(27) (29)における「かし」は動詞命令形に付いて希望表現となり、例(27)は「わたしは子をたくさんもっているの、祝いとして發句に示してほしい。」、例(28)は「わたしにも吉兆の夢の話をしてほしい。」、例(29)は「ぜひ日蓮宗を受法してほしい。」の意と解され、いずれも相手への希望を表す希望表現の下位分類の「希求」を「表出」する用法である。

7、「たまへ」の用法

次に、「たまへ」の用法を見る。本書に希望表現と認められる「たまへ」は五例見られる。

醒睡笑における希望表現について

(30) 此僧悪王に逢てかなしき目を見る我本師釈迦滅後也とも見給らん助玉へと念ずるに釈迦丈六紫磨金の光を放ち空より來り (卷二 賢たて 八〇頁)

(31) 左衛門尉藏人頼実はいみしきすき者也和歌に志ふかくて五年か命を奉らん秀歌よまさせ給へと住吉に祈申けり (卷五 上戸 一六八頁)

(32) 宗長杵の神へ參詣の刻 つくやうに守らせ給へ杵の神 米をは持たす連歌也とも くなりくと秋風ぞふく

(卷四 そでない合点 一四三頁)

例(30) (31) は会話文、例(32) は歌における用例である。例(30)は「お助けください。」、例(31)は「秀歌を詠ませてください。」、例(32)は「杵で米をつくようにお守りください。」の意と解され、いずれも神仏に対する祈りと解積できる。神仏や高貴の人を使用する命令形の「たまふ」は尊敬の意を持ちながら希望を表す表現として使用され、これらは「希求」を「表出」する用法である。

8、「ほし」「欲」の用法

次に、「ほし」「欲」の用法を見る。本書に形容詞「ほし」は一七例見られ、その内に派生語名詞「ほしさ」が三例、動詞「ほしがる」が一例見られる。また、漢字表記の「欲」が一三例見られ、その内に名詞用法が三例、漢文における助動詞用法が一〇例見られる。

(33) 數人あつまり居おのか心くくの望をかたりつるに獨はいふ我はた、生れつきたる両眼の外に目三ッほしい (卷七 似合たのぞみ 二五七頁)

例(33) は会話文における用例である。「わたしは生まれもつ両眼のほかに、眼が三ッほしい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。

(34) 紀州根來に小谷の西原と云人かたの如く有徳也しか中間ををかんとする時内の者にいひ渡すやう給分をはいか程も直きりて定よ日に三度のくひ物はほしい程くはせんと堅く約束をはしなから一向さはなく

(卷二 吝太郎 七五頁)

(35) 齋の座敷にて三位児の膳に近寄ほしくもなくと無理に飯をたくさんにおま
いれと指南しければ児箸を持たながらひた物泣く (巻六 児の噂 二二二頁)

(36) 酒つくる亭主町屋は空地なしいかにも廣キ所に住たやくと明ても暮ても
案しけるか有時京の三十三間に参り ねん比に見物し堂の前にくだり友た
ちに向て別に望はない我は此堂かほしいひ (ひ衍力 著者) は何事にや酒
部屋にしたい (巻七 思の色を外にいふ 二四九頁)

例 (34) は「一日三度の食事は食べたいただけ食べさせようと堅く約束をした
ものの」、例 (35) は「食べたくないのに無理矢理に飯を食べるよう強要したの
で」、例 (36) は「私がこの堂がほしいのは他でもない酒造場にしたことだ。」
の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である

(37) 小僧あり小夜ふけて長棹をもち庭をあなたこなたとふりまはる坊主是を見
付それは何事をするそと問ふ空の星かほしさにうち落さんとすれとも落ぬ
と (巻一 鈍副子 三三三頁)

(38) 小さかしき者ふと来りて此盗人に入たる者こそわかよく知つたくとといひ
けるま、何者ぞ聞かせてたべとあなちになびければそとさ、やきていふ
やう此盗は物かほしきには入つたと (巻二 鯉 六八頁)

例 (37) (38) は「ほし」の派生語名詞「ほしき」の用例である。「空の星がほ
しくて、たたき落とそうとするが落ちない。」「この盗人は物がほしくて入った、
と。」の意と解され、いずれも「願望」を「説明」する用法である。

(39) あの幽霊といふ者は何とて足袋をほしがると誠や死出の山刀山劍樹の嶮難
にもいる物かや不思議なる事哉と獨り言にいふて感する者あり (巻七 謡 二六九頁)

例 (39) は「ほし」の派生語動詞「ほしがると」の用例である。「あの幽霊とい
う者はどうして足袋をほしがるとのか。」の意と解され、第三者の「願望」を「説明」
する用法である。

(40) 終には都にのほり多賀の豊後守に議をうければさる事あり欲界に生をう
くる者凡三百六十種としるせる中に人これか長たり婚合の法形をまじゆる
にあり (巻一 謂被謂物の由来 一二二頁)

(41) 俗云、墮(隨カ 著者) 衆生欲、種々説法、不可限一隅、昔日聞分別功德
論云、祇園有比丘、病經六年、優波梨往問所須、答唯思酒 (巻五 上戸 一七七頁)

例 (40) (41) における「欲界」「欲」は仏教用語である。例 (40) は「この世
の欲界に生まれる者は数多ある中で、」の意。例 (41) は「墮」字が異本に「隨」
とあるのに従つて「衆生ノ欲ニ隨ヒテ、種々ノ説法アリテ、一隅ニ限ル可カラ
ズ。」と読み下され、名詞用法である。

(42) 僧云、其若時、側耳傾心有聞、未曾有經云、祇陀太子自佛言、向受五戒、
酒戒難持、畏脱得罪、今欲捨戒受十善法 (巻五 上戸 一七二頁)

(43) 郭弘為漢帝寵愛、帝問云、欲封卿郡邑、何地好、弘好飲、對曰、若封酒
泉郡、実出望外、 (巻五 上戸 一七九頁)

例 (42) (43) は巻五の漢文における用例である。例 (42) の「欲」は漢文語
法での助動詞用法であり、「今戒ヲ捨テ十善法ヲ受ケント欲ス。」と読み下され、
「今は飲酒の戒をやめて十善の法を受けたい。」の意、例 (43) は「卿二郡邑
ヲ封ゼント欲ス。」と読み下され、「そなたに領地を封じたい。」の意と解され、
いずれも「願望」を「表出」する用法である。

9、「ねがふ」「願」の用法

次に、「ねがふ」「願」の用法を見る。本書に「ねがふ」は八例見られ、その内
の一例が「冀」で表記されている。「願」は五例見られ、その内二例が巻五の漢
文に用いられている。

(44) 昔よりやせの寺は禁酒也寺中に酒を好む僧の工みて經箱をさ、せ角をとり
いかにも結構にぬらせ上に五部の大乘經と書付それを通ひにしけり酒をと
りてくるに人それとは問へは是は五部の大乘經也京にいたゞかん事を願ふ

且那あり其故に折々持てゆきかよふと答ふ (巻三 自堕落 一〇九頁)

(45) 何事も心のまゝと願ふこそつくりやまふよ満足はせじ (巻七 似合たのぞみ 二五七頁)

(46) 其席の相客に心ある人のさむらいて中だちし此旨をさたかに聞つけ寒者不
貪尺玉而翼短褐、飢者不顧千金、而羨一飧とあり、彼者抒懷も理とそ憐み
ける (巻七 似合たのぞみ 二五九頁)

例 (44) (45) は「京に經典をいただこうと願う且那がいた。」「どのようなこ
とも自分の思うように願うけれども、」の意と解され、動詞用法である。例 (46)
は漢字表記「冀」であり「こひねがう」と読み、「凍えた者は宝石を貪ることを
せず短い服をほしがる。」の意と解され、これも動詞用法である。

(47) 唯私の願にはねうだうと付たう御座ある (巻二 名つけ親方 五一頁)

(48) 貧なる人のいふやうは。我か願はしろかねを。いま一貫めほしやた、。此
やねふいてすみたやと。 (巻七 似合たのぞみ 二五七頁)

例 (47) (48) は「私の願いはただねうだうという戒名を付きたい。」「私の願
いは銀をもう一貫ほしい。」の意と解され、一般的な「願い」を表す名詞用法で
ある。

(49) 一人か申けるは誰人の建立とこそ存つるに扱は飛鳥井殿の建させ給ひて候
よのう其願主は何の合点よりいふそや其事縁起の次第かいつれのことには
も何ありかありありとよまれた程にさうかと思ふて (巻三 不文字 九八頁)

(50) 泉州境の津よりのすんわたりの商人住吉へ社参し宿願ニ船の絵を書一の神
殿に捧神楽など参らせよろこひの酒もりするに (巻七 いひ損はなほらぬ 二五二頁)

例 (49) (50) における「願主」「宿願」は仏教用語であり、発願した人、神仏
に立てる「願」を表す名詞用法である。

醒睡笑における希望表現について

(51) 俗云此地也、衆峯環峙、萬水清流、林茂碧深、花奇紅酣、異木累葉、群
草飛英、是不境待人乎、惟時可惜酒不愛、對花啜茶殺風景ナル、但願
得美酒 朋友常共斟、柳文書、又花間置酒清香發、李白詩花間一壺酒、
獨酌無相親、 (巻五 上戸 一七〇頁)

(52) 唐李白將進酒云題、岑天(夫カ 筆者)子。丹丘生。与君歌一曲、清(請
カ 筆者)君為我聽。鐘鼎玉帛不足貴 但願長醉不須醒 (巻五 上戸 一七四頁)

例 (51) (52) は漢文における用例である。「願」は漢文語法での助動詞用法で
あり、例 (51) は「但夕願クハ美酒ヲ得テ常ニ朋友ト共ニ斟マン。」と読み下だ
され、「ただ美酒を得て常に朋友と共に飲みたい。」の意、例 (52) は「但夕願ク
ハ長醉シテ醒ムルヲ須イズ。」と読み下だされ、「ただいつまでも酔いしれて醒め
ずにいたい。」の意と解され、「願望」を「表出」する用法である。先述した漢文
引用の「欲」の用例と同様、この漢文引用における「願」も巻五の「上戸」に使
われたものである。

10、「のぞむ」「望」の用法

次に、「のぞむ」「望」の用法を見る。本書に「のぞむ」は六一例見られ、動詞
として最も多く用いられる。また「望」の複合語が一六例見られる。

(53) 紀州根来より普光院御所へ言上し覚鑊の大師号を望方兄千貫つみ奉らむと
迄才覚ありつれ共頼に高野山よりさ、へにて成就せさりしを (巻一 落書 一八頁)

(54) 萬に鈍也し男のしかも富貴なるか男子を四人もちたり雨中のつれくにあ
つまり居己くか心に望む事を懺悔せよとあり (巻七 似合たのぞみ 二五五頁)

例 (53) (54) は「覚鑊の大師号を望んで、錢千貫を積みましよう。」「それぞ
れの心に望むことを打ち明けなさい、」の意と解され、動詞用法である。

(55) 巫かんまさればよさる方より上り風を所望あるま、まづ其風を吹せられる此次に

やがて其方望の風を吹かすへしと (巻六 うそつき 二四〇頁)

(56) せめて懺悔の物かたりを始々聲もおしします申せしは我レか望は別にない天下を十日持たや十日の内に夜咄する者共を皆とらへて成敗してみたいと (巻七 似合たのぞみ 二五九頁)

例 (55) (56) は「まずその上り風を吹かせ、その次にあなたの望みの風を吹かすだろう。」「私の望みは別になく、天下を十日間手にしたい。」の意と解され、「のぞみ」は名詞用法である。

(57) 旅人寒夜の物うさに古畳を一てう所望してきせられ下にしき上にもきたる古畳を一てう所望してきせられ (巻一 鈍副子 三四頁)

(58) 待ちたる人右筆をよびて此程は御目に不懸本望に存候 (巻三 文の品々 一〇〇頁)

例 (57) (58) は「古い畳を一枚望んで、」「最近はお会いしていないのが望むところでございます。」の意と解され、「所望」「本望」は字音読みの熟語であり、動詞用法及び名詞用法である。

11、「いのる」「祈」の用法

次に、「いのる」の用法を見る。本書に「いのる」は一三例見られ、「祈」の複合語は一例見られる。

(59) ある人北野に籠て本地を祈ければ、かくらくのはつせの寺の仏こそきた野の神とあらはれにけれ (巻一 謂被謂物の由来 九頁)

(60) さりながら馬のよみたる歌はいまたきかす 世中にさらぬ別のなくもがな千代もといのる人の子のため 是こそ馬の證歌さうよ (巻七 謡 二七二頁)

例 (59) (60) は「ある人が北野に籠もって本地垂迹の神仏に祈ったところ、「いつまでもと祈る子のために。」の意と解され、いずれも動詞用法である。

(61) ある人福をいのりのためはつせの観音に一七日参籠しけるか (巻八 祝済た 三二六頁)

例 (61) は「ある人が福を祈るために、「の意と解され、この「祈り」は「いのる」の動詞連用形の名詞用法である。

(62) 神々の祭礼といふも仏閣の祈禱といふも主のとむらい親の年忌いつれか祝言無祝言飲と食ともれたるや有 (巻四 そでない合点 一三八頁)

(63) 山伏かけて通りあふ たのみ祈念する程に (巻六 児の噂 二二二頁)

例 (62) (63) は「仏閣の祈禱というものも」「通りかかった山伏に、喉につかえた餅が取れるよう頼み祈るうちに、「の意と解され、「祈」の複合語で名詞及び動詞の用法である。

四、おわりに

以上、醒睡笑における希望表現の構成と用法を考察してきた。希望表現の構成形式には、助動詞「まほし」が見られるが、古歌を引用する一例のみであり、「たい」が希望表現の中心である。終助詞「ばや」と「がな」は主に歌に用いられ、雅語としての語感を持つ。「なん」に希望表現と認められる例が一例あり、「かし」は動詞命令形に付いて強い希求を表す希望表現として用いられる。「たまふ」の命令形「たまへ」は多くの用例が見られるが、そのうち命令形を取り神仏に対して用いる場合は希求の希望表現となる。

動詞「ねがう」「のぞむ」「いのる」には動詞用法と動詞連用形名詞用法とが見られ、また「願」「望」「祈」で構成する字音読みの複合語も見られる。

漢字表記の「欲」「願」は語り文においては漢語「欲」、和語「ねがい」と読む名詞用法であるが、漢文の引用部分においては漢文語法の助動詞として、「ト欲ス」「願クハ」と訓読され、「願望」を「表出」する用法で用いられる。

全体的に見ると、醒睡笑において「まほし」「ばや」の用法が衰退し、希望表現の最も中核的な存在は「たい」になっている。「たい」の多用と「かし」の希望表現への転用、また動詞「のぞむ」の多用などに、この時代の「語り」としての用語・用法が見られる資料であるといえる。

【注】

(1) 柴田昭二、連 仲友「希望表現の通史的研究 序説」『香川大学教育学部研究報告 第1部第109号』平成12年3月。

(2) ここでいう希望表現とは、人の願望望みに関する、一種の心情的表現形式である。また、その下位分類として、話者自身の動作・状態に対して向けられるものを「願望表現」、他者の動作・状態に対して向けられるものを「希求表現」と称する。さらに、希望を発する場合を希望の「表出」、それ以外の問い質しや過去などの場合を希望の「説明」と称する。現代日本語においては、「願望」は「〜たい」の形で、「希求」は「〜てほしい」の形で表現するのが最も一般的である。したがって、一人称現在形形式「一人称〜たい」「一人称〜てほしい」はそれぞれ「願望」、「希求」の「表出」であり、一人称の過去形「一人称〜たかった」「一人称〜てほしかった」、二人称形式「二人称〜たいか」「二人称〜てほしいか」、三人称形式「三人称〜たがる」「三人称〜てほしがる」などの形式は、「説明」にあたる。

(3) 注(2) 参照。

(4) 注(2) 参照。

(5) 例(2) 参照。

(6) 注(2) 参照。

【付記】

ほぼ同時期のキリシタン資料の内、天草版諸本における希望表現に関する用例を記述した拙文がある。就いて見られたい。

・柴田昭二「天草版における希望表現」(香川大学国文学会『香川大学 国文研究』)

第48号 二〇二三年九月三〇日

(しばたしょうじ 香川大学名誉教授)

(れんちゅうゆう 広島市立大学客員研究員)

(二〇二三年一月三〇日受理)